



写真1：大銀杏が写る昭和3年の入試風景（慶應義塾福澤研究センター提供）



写真2：昭和7年の創立75年記念式典に来塾した秩父宮（慶應義塾図書館提供）

「歴史する“アプリ「慶應時空ぶらっと」」

文学部民族学考古学専攻 教授 やまぐち 山口 とおる 徹

場所には記憶を想起させる力がある。痕跡が多いほどその力は強い。自分の体験でなくとも、古い写真に写る風景の名残を見つけると、過去の出来事が急に身近に思えてくる。

昭和3年の入試風景には、厚手のマントや羽織をまとった受験生たちがあふれている（写真1）。見慣れない木造校舎が周りを囲んでいるけれど、塾監局が写っているから葉を落とした樹木は三田キャンパス中庭の大銀杏なのだと分かる。それから4年後の昭和7年、義塾創立75年記念式典には秩父宮が来塾なさった。そのときの写真には、木造校舎の間を抜けて徒歩で式典会場（大講堂）へ向かう宮様を、整列して出迎える幼稚舎生らが写る（写真2）。校舎を結ぶ開放廊下の屋根の形から、児童が立ち並ぶ通路は先の入試風景と同じものだと分かる。そうすると、宮様はちょうど大銀杏の横を通られているのだろう。

場所には、人々の記憶や出来事の痕跡が積み重なっている。そんな歴史の重層性を伝えたくて、キャンパスの古写真を時空間上に配置したスマートフォン無料アプリ「慶應時空ぶらっと」を開発

した。おかげさまですでに1300ダウンロードを超えている。開発の発想は、遠く南太平洋の調査から始まった。サンゴ礁の島で発掘していると、島民が上からのぞき込んでくる。積み重なる文化層にどんな意味があるのかと訝し（うたが）そうに眺めている。そんなとき、忘れられた過去を現在に取り結ぶエージェントになりたいと本気で思った。出来上がったアプリを授業で活用してみると、古写真を素材に思い思いの塾史を学生たちが紡ぎはじめた。まさに、「歴史する…doing histories」体験を生み出すアプリの思わぬ効用だった。こうして複数形の歴史を用意することは、単数形の歴史に収斂（れん）しようとする偏った意図に抗する一つの力となるにちがいない。考古学者や歴史学者の仕事は古くて新しいのだ。



▲アプリ画面イメージ
iOS版とAndroid版があります。
各端末のアプリダウンロードサービスで「慶應時空ぶらっと」と検索してください。